

日本銀行金融研究所貨幣博物館の 日本貨幣史展示シナリオ*

加藤和正**

I 狹いと特色

II 展示解説

1. 古代 (1)物々交換から物品貨幣へ
(2)わが国初の貨幣発行
2. 中世 中国錢の使用
3. 近世 (1)江戸時代幣制の芽生え
(2)独自の幣制の成立
(3)幣制の安定と動搖
4. 近現代 (1)明治初期の幣制混乱
(2)円の誕生
(3)日本銀行の設立
(4)金本位制度から管理通貨制度へ

I 狹いと特色

日本銀行は、創立百周年記念事業の一環として金融研究所内に貨幣博物館を設置することとし、昭和57年来準備作業を進めてきたが、この程完成をみ、11月6日から一般公開（但し事前予約制）を開始した。この貨幣博物館の展示は、①わが国貨幣史に沿ってストーリーの展開を行った「日本貨幣史の展示」、②研究者、収集家を対象に資料価値の高い貨幣を多数展示した「収蔵展示」、③内外貨幣の珍しい特徴を浮彫

りにして一般見学者の関心を惹くようにした「さまざまな貨幣の展示」の3部門から構成されている。このうち基本系列展示ともいべき「日本貨幣史の展示」の狭いと特色は以下の通りである。

まず、主な狭いは、①書物、講義と並ぶ教育媒体としての現代的博物館展示の手法、すなわちさまざまな展示物（貨幣の他、絵、写真、地図等）を使ってストーリーを語る手法を採用し、②わが国貨幣史に沿ったシナリオの展開を行い、貨幣の機能や通貨価値安定の重要性につい

* 本展示シナリオの作成に当たり、日本貨幣史に関しては東京大学館龍一郎名誉教授、創価大学山口和雄教授、中央大学中田易直教授、大阪大学作道洋太郎教授、和歌山大学三上隆三教授、慶應大学西川俊作教授、田代和生助教授、一橋大学寺西重郎教授、國立民族学博物館梅棹忠夫館長、國立歴史民俗博物館土田直鎮館長、岡田茂弘教授の各氏から、それぞれ有益な助言をいただいた。厚く御礼を述べたい。なお、本シナリオの作成には研究所内の各課が協力した。

** 日本銀行金融研究所図書標本貨幣課長

て考えるきっかけを見学者に提供することにある。

展示シナリオの作成に当たっては、次の4つの視点を重視した。

第一は、物品貨幣、金属貨幣、紙幣、銀行券など、さまざまな貨幣の発生事情をトレースすることにより、貨幣の機能を明らかにしようとしたことで、これは貨幣について歴史展示を行う場合欠くことのできない視点である。貨幣史を振り返ると、基本的な金融革新ともいえる新しい貨幣の誕生には、時代や地域によって多様な要因が働いているが、交換経済の拡大に伴って、より効率的な決済手段が求められていたという共通の背景を指摘することができよう。

第二は、通貨価値安定の重要性を浮彫りにするため、皇朝錢時代（8～10世紀）、江戸時代の元禄・宝永期、幕末期、西南戦争当時、第二次大戦後など、日本史上の大変動のインフレーションを取り上げていることである。このようなインフレの展示解説に当たっては、通貨供給量の変動があらゆる時代に共通する背景であるという観点から一貫した説明を行っており、例えば江戸時代における貨幣改鑄の影響等もこのような視点から整理されている。

第三は、日本貨幣史では貿易などを通じる海外との交流が大きな意味をもっているので、これをできるだけフォローしている点である。中世には農業や手工業の発達を背景に交換経済が拡大し、これに伴う貨幣需要の増大が貿易を通じて流入した中国錢によって賄われた。これに対し、江戸時代には長崎貿易などを通じて金銀銅が流出し、貨幣素材の不足が元禄以降の改鑄の一因となった。また開港後は国内の金銀比価（金1g ≈ 銀5g）が海外（金1g ≈ 銀15g）に比べて著しく金安であったことが金の流出を

もたらし、その対策として実施された金貨の急激な悪鑄（1860年1両当たり純金量を約1/3に削減）が幕末期のインフレを一層拍車した。

第四は、日本貨幣史上の特色を明らかにし、基本的な歴史展開を捉えやすくするため、時代区分を見直していることである。その結果、戦国時代は江戸時代前史として位置付けることとした（通説では中世後期とされることが多い）が、これは、①戦国後期には商工業の発達を背景に金銀貨がつくられ流通するようになり、②甲州武田氏は江戸時代の金貨単位となった両、分、朱という4進法の貨幣単位を設け、また③豊臣秀吉は金銀貨発行の集中化をはかるなど、江戸時代に成立する貨幣制度の萌芽がみられた点を評価したからである。

次に、展示シナリオ構成面の特徴を挙げると、その第一点は、個々の貨幣史上のエピソードに関する各論的テーマを展示し、更にこれをまとめた総括テーマを設けたことで、総括テーマを見るだけでも日本貨幣史の基本的な展開をたどることができる。第二点は、各論的テーマなどを補足するものとして補完テーマを設定したことである。これによって日本貨幣史上の補足的なエピソードを解説したほか、海外との比較を行うことが適當な箇所には適宜こうしたテーマを挿入し（例えば江戸時代の「紙幣発行」のテーマの後に「中国・ヨーロッパでの紙幣発行」のテーマを挿入するなど）、世界貨幣史との関連も理解できるように構成した。なお、貨幣史上の学説については原則として多数説を採用し、対立がみられる場合は両論を併記した。

II 展示解説¹⁾

日本貨幣史の展示シナリオの内容及び構成を

1) 原則として(1)(2)…を付したタイトルは「総括テーマ」、イ.ロ.…を付したものは「各論的テーマ」、括弧内のタイトルは「補完テーマ」を示す。

具体的に示すため、以下に展示ケース内の展示解説の本文を掲げる。

1. 古代

(1) 物々交換から物品貨幣へ [～A.D. 8 c.]

昔、私たちの祖先が完全な自給自足の生活をしていた頃は貨幣（交換のなかだち）は必要ではなかった。

やがて人々は自分の物と他人の物とを交換して欲しい物を手に入れる（物々交換）ようになつたが、物々交換にはお互いの希望が容易に一致しないなどの難点があった。そこで①誰もが欲しがり、②集めたり分けたりして任意の値打ちを表わすことができ、③容易に持ち運び、保存できる品物が、貨幣として使用されるようになった。これが物品貨幣で、稻、矢じり、砂金、麻布などが多く用いられた。



稻



矢じり

物品貨幣のなかでは、金属、とくに金、銀、銅が貨幣として優れた性質をもっていたために、やがてこれらが他の物に代って広く用いられるようになった。

(金属貨幣の発生と伝播)

金属貨幣の歴史をさかのぼると、中国などの東洋式鋳造貨幣とギリシア・ローマなどの西洋式打刻貨幣の2つに大別される。

中国の金属貨幣は、農具、刃物などを型どった布幣（鋤型銅貨）や刀幣（小刀型銅貨）に始まる。これらは春秋時代の紀元前8～7世紀頃、交易の発達を背景として鋳造された。紀元前3世紀、秦の始皇帝は漢字を配した円形方孔（円形の中央に正方形の穴を開いた形）の貨幣に統一、この形態はその後約2千年間踏襲されるとともに、東アジアの中国文化圏に伝播した。



(他民族の物品貨幣)

世界各地のさまざまな民族は、物品貨幣として貝殻、石、穀物、毛皮、家畜、金属などを使用した。中国の殷・周の時代（16～8 c. B.C.）には、装飾品として珍重された南方海産の宝貝が物品貨幣として使用されたことから、貨幣や経済に關係のある漢字には貝のつくものが多い。



中国殷・周時代の貝貨(宝貝)

一方、西洋ではリディア（現トルコの西部）で紀元前7世紀に最古の金属貨幣がつくられた。これはエレクトロンと呼ばれる天然の金銀合金の粒に動物や人物を打刻したもの（エレクトロン貨）で、その形態がギリシア、ローマに伝播した。シルクロードが通じていた西域にはアレクサンダー大王の征服後ギリシア貨幣の伝統が伝わり、これを受け継いだ西域諸王朝の貨幣が数多く知られている。



(2) わが国初の貨幣発行 [8 c.~]

わが国は8世紀初、唐錢（開元通宝）をモデルに和同開珎（わどうかいちん）という貨幣を初めて鋳造した。これは中国の先進的な文物制度を積極的に取り入れようとしたことによるもので、独自の錢銘をもつ貨幣の鋳造は東アジアでは中国に次いで最も早い。

それ以後約250年の間に銅貨12種（皇朝十二錢）、銀貨2種、金貨1種がつくられた。これらは皇朝錢と総称されている。皇朝錢は唐錢をモデルとしたため円形方孔の形となったが、これがその後のわが国の銅貨の基本的な形として、明治初年までの約1,200年の間受け継がれることになった。



(和同開珎の錢銘等に関する学説)

「和同」の意味の2説

- ① めでたい言葉で年号とは無関係。
- ② 「和銅」という年号の意味。

「珎」の字の読み方の2説

- ① 「珍」の異体文字であり「ちん」と読む。
 - ② 「寶」（宝）の略字であり「ほう」と読む。
- 錢面の字体の相異などによる「古和同」と「新和同」の区別に関する2説

- ① 政府が708年に初めて公鋳したものが新

和同で、それ以前の私鋳錢ないし試作品が古和同。

- ② 政府が720年に中国から熟練した鋳錢技術者を招いてつくらせたものが新和同で、それ以前のものが古和同。

イ. 貨幣の流通促進策

律令政府は、皇朝錢を広く民衆に使用させるため、①多額の貨幣を蓄えた者に位階を授与する、②田畠の売買や旅行に貨幣を使用するよう強制する、などの措置を講じた。

その結果、官吏や土木工事関係の労働者が、給与や工賃として支払われた貨幣を用いて都の東西市等で農産物を買入れたり、家屋敷や田畠が貨幣で売買されるなど、部分的ながら皇朝錢が流通するようになってきた。

しかし皇朝錢の流通範囲は主として近畿地方に限られ、それ以外の地域では依然その他の物品が貨幣として使用された。このことは政府が税の錢納制度（調銭）を設けた地域（722年）が近畿およびその周辺にとどめられていることからもうかがえる。

ロ. 皇朝錢の通貨価値低下

政府は財政事情の悪化や銅の涸渴などから、改鋳のたびに皇朝錢の質を悪化させていった。このため、その通貨価値は急速に低下し、9世紀中頃には錢1文当り米の購買量は8世紀初め頃に比べ約 $\frac{1}{150}$ に下落した。²⁾

やがて民衆の間に錢離れが起こり、10世紀末には政府の弱体化もあって皇朝錢の鋳造が中止され、再び稻などの物品が貨幣の主体となった。



初期の皇朝錢

末期の皇朝錢

2) 日本銀行調査局編『図録 日本の貨幣』第1巻(1972)参照。

2. 中世

中国錢の使用 [12c.~]

平安末期（12世紀頃）以降、二毛作による農業生産の増大や手工業（織物、鍛冶等）の発達を背景として交換経済が拡大し、銭貨の需要が高まってきた。しかし当時は皇朝錢の鋳造が停止されていたため、こうした需要は主に日宋貿易を通じて流入した中国錢（主に宋錢）で賄われることとなった。

室町時代以後も大量の銅錢（主に明錢）が流入したが、経済の拡大に応じた必要量を満たすには足りず、中国錢などを模した私鑄貨幣（鑄錢）でこれを補う状態が江戸時代初頭まで続いた。



イ. 貿易を通じる中国錢の流入

遣唐使の廃止（9世紀末）以前から中国船の往来がみられたが、宋代に入るとこれが次第に活発化し、12世紀中頃からはわが国の商船も南宋との間を往来するようになった。

わが国は砂金、水銀、硫黄等を輸出する一方、多量の銅錢を輸入した。私貿易から転化した倭寇の活動は14世紀後半と16世紀に盛んになったが、中国錢入手することもその大きな目的の一つであったといわれている。

ロ. 銭貨流通の浸透

12世紀頃から交通上の要地や神社、仏閣などの門前市を中心に商業が活発化し、銭貨の流通が拡がった。このことは、当時の不動産売買に

おける貨幣の使用割合が13世紀前後より急速に上昇していることからもうかがうことができる。

不動産等の売買契約書（売券）のうち 貨幣を使用したものの割合	
8~10世紀（皇朝錢時代）	31%
11世紀（公鑄停止時代）	0
12~14世紀（渡來錢時代）	73
14~16世紀（フ）	94

また商業の発達に伴って専門の商品仲介業者としての問屋（初め問または問丸といわれた）が成立し、割符あるいは替錢と呼ばれた為替を使って隔地間の取引を行うようになった。

ハ. 鑄錢と撰錢（せんせん）

銭貨は原則として1枚1文であったが、質の優劣が著しかったため、良錢と悪錢（鑄錢とも呼んだ）を選別して、悪錢の受取りを拒否したり、割増しを要求したりする撰錢行為が15世紀後半から顕著となった。

室町幕府をはじめ大名たちは、撰錢を禁止したり良錢悪錢の混用割合を定めたりする「撰錢令」をしばしば公布して銭貨を円滑に流通させようとしたが、撰錢行為は容易になくならなかった。

（ヨーロッパの金銀貨）

わが国で主に銅を素材とした鋳造貨幣が使用されていた頃、ヨーロッパではローマ貨幣の伝統を受け継いだ金銀の打刻貨幣が広く用いられていた。8世紀末のデニエール銀貨や13世紀中頃のフローリン金貨などは、ほぼヨーロッパ全域にわたり流通した。



3) 小葉田淳（1958）、玉泉大梁（1969）参照。

3. 近世

(1) 江戸時代幣制の芽生え [16c.]

戦国後期の16世紀頃には、江戸時代幣制の芽生えともいえる動きがみられた。

戦国大名による楽市、楽座などの商業振興策や城下町の建設を背景に商工業が一層発達し、高額貨幣の需要が増大したため、金銀貨がつくられ流通するようになった。この間、甲州武田氏は金貨の貨幣単位を設け、豊臣秀吉は金銀貨発行の集中化をはかった。一方、銅の精練技術の向上により、良質な銅銭を鋳造できる基盤も整ってきた。

イ. 金銀貨の発達

戦国大名の鉱山開発積極化により、金、銀の生産が飛躍的に増大し、これによって金銀貨がつくられるようになった。

金は重さが価値を表わす秤量貨幣として砂金から延板状のものに変わったあと、小判状などの一定の金額を表わす計数貨幣へと発達した。これに対し、銀は秤量貨幣のまま不定形のものからやがて「なまこ状」のものへと変わっていった。



ひろも
蛭藻金



石州銀

ロ. 戦国武将の貨幣政策

武田氏は16世紀中頃、額面金額を表示した金貨（計数貨幣）をつくり流通させたが、その4進法の貨幣単位のうち、両、分、朱は江戸時代幣制の金貨単位として踏襲された。



(一両)



(一分)



(一朱)

甲州金

一方、織田信長の後を継いで天下を統一した豊臣秀吉は、武将たちの力を抑えるため、その金銀鉱山を接収するか、または産出金銀の一部を上納させ、これにより大判をはじめ種々の金銀貨を製造し、徳川氏による貨幣制度統一の先駆となった。



天正菱大判



太閤分銅金



金錢



銀錢

豊臣秀吉がつくった金銀貨

(2) 独自の幣制の成立 [17c.]

関ヶ原の戦（1600年）に大勝した徳川家康は貨幣制度の統一に着手し、翌年慶長金銀貨を発行した。銅貨（銭）については暫く渡来銭の流通を認めたのち、幕府自ら発行した寛永通宝に統一した。一方、17世紀初め頃、伊勢山田地方で商人の信用を基礎とした紙幣（山田羽書）^{はがき}が出現し、やがて各藩でも領内通用の紙幣（藩札）が発行されるようになった。

こうして幕府の金銀銅貨からなる三貨制度と各地における紙幣の分散発行の併存という、わが国独自の幣制が成立した。



イ. 三貨制度の形成

江戸幕府は、それまで各地に流通していた種々の貨幣の形態を概ね踏襲しつつ、貨幣発行の集中化と貨幣様式の統一をはかることを目的として、金、銀、銭（銅）の3種の貨幣から成る三貨制度を設けた。

金、銀、銭の三貨はそれぞれが別個の体系をもち、単位の名称も異なっていた。金貨は小判1枚の1両を基準とし、それ以下を4進法の単位で表わす計数貨幣、銀貨は重さが価値を表わ

す秤量貨幣、銭は1個1文の計数貨幣で、相互の交換は日々の時価相場で行われた。

(金銀銅の流出)

幣制の整備に伴い中国銭の流入は止まったが、生糸、絹織物、薬品、書画等の輸入代金として金銀銅があいついで流出した。

当初、国内では銀が金に比べ割安であったことから多量の銀が流出、1670年代以降は金もオランダ貿易を通じて流出した。このため幕府は貿易量を制限するとともに貿易取引を銅による決済に切替えていたが、今度は銅の流出が増大して銅が不足してきたため、1715年長崎来航船数の大幅削減措置をとった。

(朝鮮・琉球との貿易)

対馬藩と薩摩藩は、それぞれ幕府の許可を得て朝鮮、琉球と貿易を行ったが、これらを通じても多量の銀が流出した。

対馬藩は朝鮮人参や中国産の生糸、絹織物などの輸入代金を丁銀で決済していたが、朝鮮側から慶長銀に比べ質の悪い宝永銀の受取りを拒否されたため、薬用としての人参輸入を名目に慶長丁銀と同品位の丁銀の交付方を幕府に願い出た。幕府がこれに応じて特鑄（1710年）したのが人参代往古銀といわれるものである。

ロ. 両替商の発達

すでに中世において金銀の売買を業とする商人がいたが、三貨制度の成立により各種貨幣間の交換取引が増大したこともあって両替商が発達した。

有力なものは、通常の両替業務のほかに、預金の受入れ、大名、商人などへの貸付け、手形の発行、為替の取組みなどの業務を営み、さらに幕府貨幣の改鑄時には新旧貨の引替えを担当し、諸藩の藩札発行や財政資金の調達にも関与した。

ハ. 紙幣の発生

中世以来商業の発達した伊勢山田地方で、

1600年頃、商人（神職でもあった）が秤量銀貨の釣り銭の代わりに発行した山田羽書（小額銀貨の預り証）が紙幣として流通するようになった。その発生はイギリスの金匠手形（1640年頃）よりも早い。

やがて近畿地方を中心に商人などが私札を発行し、また各藩では財政赤字の補填や幕府貨幣の不足緩和などを目的として、幕府貨幣との引替えを原則とした藩札を発行するようになった。福井藩（松平氏）が1661（寛文元）年に発行した紙幣がわが国最初の藩札といわれている。

藩札の発行に際しては、藩内外の有力商人が札元となり、発行準備金（幕府貨幣の手持ち準備）の調達や発行・引替え業務などに当たった。



山田羽書



福井藩札



和歌山藩札

（中国・ヨーロッパでの紙幣発生）

世界最初の紙幣は中国で生まれた。四川地方（鉄の多産地）では早くから鉄銭が使用されていたが、重くて不便だったので、北宋時代（10世紀末頃）に商人が紙幣（交子）をつくり、鉄銭に代えて流通させた。しかし、たびたび取り付けが起こったことから11世紀初頭には紙幣の発行は官営とされ、民間での発行が禁止された。その後、南宋、元、明などの政府も紙幣を発行

した。

中世のイギリスでは、旅行者が盗難を避けるため、金匠に貨幣を預けてあることを証明する預り証を携行し、目的地で指定された金匠に呈示して貨幣と交換してもらうようになった。これが金匠手形で、1640年頃紙幣として流通はじめた。

一方、17世紀初めスウェーデン政府は、銀が涸渇したため、素材価値の低い銅で銀貨と同じ価値をもたせた大形銅板貨幣を発行した。この不便な貨幣の代わりに、ストックホルム銀行が1661年に発行した紙幣が、世界最初の銀行券である。



ストックホルム銀行券

（3）幣制の安定と動搖 [17 c. ~]

幕府は財政事情の悪化や貨幣素材の不足に対処し、元禄・宝永期に金銀貨の質を落とす改鑄を行ったが、これによる貨幣量の増加から物価が上昇すると、その対策として貨幣量を減少させることを目的とした改鑄を実施、さらには、その行過ぎを是正するなど、今日の金融政策の萌芽ともいえる動きがみられた。この結果、元文の金銀貨（1736年改鑄）が約80年間も安定的に流通するといった状態も出現した。

その後幕府は財政補填を目的に悪鑄を重ね、また各藩も藩札等を乱発したため、幕末期には激しいインフレが発生した。

イ. 幕府の改鋳政策

① 元禄・宝永の改鋳

將軍綱吉の奢侈や災害等による幕府財政の悪化、金銀の海外流出に伴う貨幣用地金の不足などに対処して、幕府は1695（元禄8）年と1706～11（宝永3～8）年に貨幣の純金銀量を大幅に減らす改鋳を実施した。

これにより幕府は多額の改鋳差益（出目）を収得、財政事情は一時緩和したが、貨幣量の膨脹から米価をはじめ諸物価が高騰し、庶民の生活は困窮した。

② 正徳・享保の改鋳

新井白石は1713（正徳3）年に、物価の高騰は貨幣量が多過ぎるためであるとして、金銀貨の質を高め貨幣量を減少させるよう建議した。これに基づき幕府は1714（正徳4）年、金銀貨を慶長金銀と同品位のものに改鋳、翌正徳5年には小判の品位をさらに幾分高めた（この小判は享保小判とも呼ばれる）。

この結果、金銀貨の流通量は大きく減少し、経済活動は停滞し物価は下落、とくに米価の低落が大きかったため、農民や武士は深刻な影響を受けた。



宝永小判

正徳小判

元文小判

③ 元文の改鋳

將軍吉宗は米価の下落を防ぐため商人に買米を強制するなどの対策を講じたが、実効があが

らず、1736（元文元）年、金銀貨の品位を落とす改鋳によって貨幣の供給量を増やした。

これに伴って米価が回復し、経済情勢も好転、元文期に制定された金銀貨は約80年にわたり安定的に流通した。この改鋳は、錢貨増鋳によって社会の困窮を救うよう説いた荻生徂徠の影響による面が少くないといわれる。

ロ. 明和期の幣制改革

18世紀後半には、換金作物の普及に伴う農村への貨幣経済の浸透もあって、小額貨幣の需要が増大した。

これに対して幕府は銭錢を増鋳し、真鑄の四文銭を新鋳したあと、1772（明和9）年、南鑄二朱銀を金貨 $\frac{1}{8}$ 両と等価の計数貨幣として発行した。この銀貨は取扱いが便利なことなどから次第に秤量銀貨に代わって流通するようになり、19世紀初頭には銀貨流通量の約6割に達した。こうして実質的に銀貨の補助貨幣化、ひいては金本位制への移行が進んだとみられている。

寛永通宝一文銭
(鉄)寛永通宝四文銭
(真鑄)明和南鑄
二朱銀

ハ. 江戸時代後期の改鋳

19世紀に入ると、將軍家の奢侈や飢饉の連続、国防費の増大などから、幕府財政は極度に逼迫、このため、ほとんど改鋳差益の取得のみを目的として、文政期（改鋳期1818～29年）および天保期（同1832～37年）に悪鋳が実施された。

これにより幕府が入手した差益は、巨額（再度の改鋳でそれぞれ500万両以上）に達したが、他方、金銀貨の流通量は再度の改鋳でそれぞれ6割、2割近い膨脹となり⁴⁾、物価の趨勢的上昇

4) 岩橋勝（1976）参照。

をもたらした。

ニ. 開港後の金貨流出

1859（安政6）年の開港直後、かなりの金貨が海外へ流出した。これは、当時国内の銀に対する金の価格（金1g＝銀5g）が海外（金1g＝銀15g）よりも著しく割安であったにもかかわらず、幕府がわが国の金・銀貨と海外の金・銀貨をそれぞれ同重量で交換する条約を外国と結んだためで、外国人は日本に洋銀貨を持ち込み、金貨に換えて海外へ持ち去ることによって多額の利益を得ることができた。

幕府は、こうした金貨の流出に対処するため、天保・安政小判の銀貨に対する価値を約3倍に引き上げる応急策を講じたのち、翌1860（万延元）年、1両当たり純金量を $\frac{1}{3}$ 近くに減少させた万延金（万延小判の純金量1.9g、安政小判同5.1g）を発行し流通させた。この結果、国内の金銀比価は概ね海外並みとなり、漸く金貨の流出が止まった。



洋銀貨
(メキシコ銀貨)



安政小判



万延小判

ホ. 幕末のインフレーション

幕末期になると、大規模な金貨の悪鑄・増鑄（1860年）に加え銭貨も増鑄され、また開港地では高額紙幣が発行された。一方、諸藩も財政補填のため藩札の乱発や貨幣の増鑄に走ったので、貨幣量は急激に膨脹した。金銀貨の流通量のみをみても、1859（安政6）年以降約10年間に2.5倍に増大したと推定されている。⁵⁾

こうして通貨価値が急落し、諸物価が高騰するなかで江戸幕府は崩壊していった。

4. 近現代

（1）明治初期の幣制混乱 [1868～]

明治政府は欧米先進国にならい近代国家の建設を急いだが、当初は通貨制度を整備するまでのゆとりはなく、幕藩時代の金銀錢貨、藩札などをそのまま通用させる一方、自らも「両」単位の貨幣、紙幣を発行、また民間の富商に設立させた為替会社にも紙幣を発行させた。

このため各種通貨間の交換比率は非常に複雑化、しかも銀目建ての廃止により関西で銀目手形の引換えが殺到し両替商の倒産が続出したり、偽造金貨・紙幣が横行するなど通貨制度は混乱をきわめた。



イ. 政府紙幣（両単位）

確固たる財政基盤をもたなかった明治政府は、国庫の窮乏を補填するとともに、各藩や民間に殖産興業資金を貸出すため、1868（明治元）年「太政官札」を発行した。

しかし、この政府紙幣は新政府の権威が確立していない段階で発行され、兌換準備や発行額の制限もなかったため、その価値は著しく下落して幕末以来の幣制混乱に一段と拍車をかけた。

5) 岩橋勝（1976）参照。

口. 為替会社紙幣（両単位）

政府は1869（明治2）年、内外商業の振興を目的として、江戸期以来の富商を中心に通商會社と為替会社を各8社設立させた。

為替会社は、商業取引の円滑化を任務とした通商會社を金融面から支援することを目的とし、紙幣発行のほか、預金、貸出、為替、両替などの業務を行ったが、その名称自体“Bank”的訳語であり、わが国近代銀行事業の始まりといわれる。

為替会社は一時かなり活発に活動したが、やがてほとんどが多額の損失を生じて衰退、国立銀行が設立されるに及んで、あいついで廃業した（横浜為替会社のみは第二国立銀行に改組）。



東京為替会社紙幣



横浜為替会社紙幣（洋銀券）

（ヨーロッパにおける銀行の発達）

中世のヨーロッパでは、金匠や両替商が預金、貸出、為替等の業務を行うようになり、こうした業務が原型となって銀行が発達した。12世紀にイタリアのジェノアの両替商が営業に使用した「両替台 “Banco”」が今日の Bank, Banque の語源といわれる。

17世紀頃には各地で銀行が設立され、やがて銀行への預金を特定の人あるいは持參人に支払うことを依頼した小切手や手形が振出され、預金が通貨としての役割を果たすようになった。

（2）円の誕生 [1871~]

政府は欧州主要国が金本位制に移行していく傾向を眺め、1871（明治4）年「新貨条例」を

制定し、金1.5gを1円とした近代洋式製法の新貨幣を発行、貨幣制度の統一をめざした。

もっとも、太平洋周辺の銀本位諸国との貿易上の便宜をはかるため、貿易銀として一円銀貨を製造し、これにもほぼ無制限の通用力を認めたので、実質的には金銀複本位制の採用とみられている。

イ. 新貨条例

1871（明治4）年5月公布の新貨条例により、①金貨を本位貨幣として無制限に通用させ、銀貨と銅貨を補助貨幣とする、②円、錢、厘の10進法の単位を採用する、③貨幣は近代洋式製法による円形の打刻貨幣とすることなどが定められた。

太平洋周辺地域では貿易決済にメキシコ・ドルなどの1ドル銀貨が使用されていたので、わが国も貿易上の便宜をはかるためメキシコ・ドル銀貨とほぼ同一の品位・重量の貿易銀をつくり、開港場で無制限通用を認めるほか、一般的な取引においても相互の話合いで自由に使用してよいこととされた。この貿易銀は1878（明治11）年に国内でも無制限に通用する本位貨幣とされたため、この時点でわが国は法制上金銀複本位制に移行したことになる。



新貨条例による金貨と貿易銀

口. 政府紙幣

明治維新直後に発行された太政官札は、いずれ新貨幣と交換されることになっていたが、政府はその余裕がなかったばかりでなく、財政事

情の窮迫や新貨幣の不足などに対処して、為換座三井組の名義で新しい円単位の政府紙幣を発行した（明治4～5年発行の大蔵省兌換証券と開拓使兌換証券）。

次いで政府は、旧紙幣の回収を目的としてドイツに印刷を委託した「新紙幣」（明治通宝札）を1872（明治5）年に発行、1878年に至り政府紙幣はこれに統一された。



大蔵省兌換証券



新紙幣(明治通宝札)

ハ. 国立銀行紙幣

政府は、民間に高まった銀行設立の気運を捉え、民間銀行に兌換銀行券を発行させることによって政府紙幣の回収と殖産興業資金の供給をはからうとし、1872（明治5）年「国立銀行条例」を制定した（当初4行がこの条例に基づいて設立された）。

その後、1876年の条例改正により事実上不換紙幣の発行が認められたことに伴い銀行数は増加し、1879年末には153行を数えるに至った。



(旧券)



(新券)

国立銀行紙幣

これらの銀行はいずれも同形式で発行者名の異なる国立銀行紙幣を発行した。

二. 新旧貨幣の交換

円単位貨幣の普及に伴い、江戸時代および明治初期の貨幣は、1874（明治7）年から概ね次のような規則で交換された。

① 古金銀貨

品位等をもとに定められた引換え価格により新貨幣に交換。

② 明治初期の両単位政府紙幣

金1両=1円で「新紙幣」（明治通宝札）に交換。

③ 藩札、府県札

廃藩置県の際の発行高、引換え準備高（金銀貨の手持ち準備）をもとに定められた引換え価格により、新紙幣および小額貨幣に交換。

なお旧銭貨は銅貨不足のため新貨幣単位に読みかえて通用させた。

(3) 日本銀行の設立 [1882～]

西南戦争（1877年）の勃発に伴い、戦費調達のため政府紙幣や国立銀行紙幣が増発されたことなどから激しいインフレが発生した。これは厳しい財政緊縮と紙幣の回収整理により収束されたが、その過程で、兌換銀行券の一元的な発行によって紙幣の乱発を回避し、通貨価値の安定をはかることの必要性が認識され、1882（明治15）年中央銀行としての日本銀行が設立された。

イ. 日本銀行の開業

日本銀行は歐州先進国の中央銀行制度にならって設立され、1882（明治15）年10月10日、永代橋際の旧北海道開拓使出張所の建物を店舗として開業した。

発券制度が整備されるまでには、それからなお若干の時日を要したが、貨幣制度の統一と兌換制度確立の制度的基礎固めが行われたという

意味で、日本銀行の創立はわが国経済近代化の基本的礎石となった。⁶⁾

(海外主要国の中銀設立)

海外主要国では、数多くの銀行が紙幣を発行していた状態から、紙幣発行を単一の銀行に集中化するというかたちで、中央銀行制度が整備された。

中央銀行設立年

1668 スウェーデン	1875 ドイツ
1694 イギリス	1882 日本
1800 フランス	1893 イタリア
1814 オランダ	1913 アメリカ
1835 ベルギー	

□. 最初の日本銀行券

日本銀行の創立当時は紙幣と銀貨との価格差がなお大きかったが、その後の紙幣整理の進展などにより、紙幣の価値が銀貨とほぼ同程度に回復した。そこで日本銀行は、1885（明治18）年に銀行券の発行に踏切った。これは本位貨幣の一円銀貨と引換えられる兌換銀券であった。

国立銀行紙幣と政府紙幣は1899（明治32）年末に通用停止となり、わが国の紙幣は日本銀行券に統一された。



最初の日本銀行券
(明治18年5月発行)

△. 日本銀行兌換券

19世紀後半における欧米諸国の銀本位制離脱と世界的な産銀量の増加から、銀の金に対する

価格が1890年代に入り著しく低下したため、事実上、銀本位制下にあったわが国では、為替相場が下落し、国内物価が上昇を続けることになった。

そこで、わが国も欧米先進国の大勢に従い、1897（明治30）年、金本位制度を採用し、金0.75 gを1円とする「貨幣法」を制定した。これに伴い、金貨と引換えられる「日本銀行兌換券」が発行された。



貨幣法による
金貨



日本銀行兌換券

(4) 金本位制度から管理通貨制度へ [1931～]

わが国は第1次大戦中にアメリカなどに追随して金の輸出を禁止した（1917年）。その後、金融恐慌の発生などから欧米諸国に数年遅れたものの、1930（昭和5）年1月にこれを再開した。

しかし翌1931年イギリスが金本位制を離脱したため、わが国も同年12月再び金の輸出を禁止し、日本銀行券の兌換は原則として停止された。

1941（昭和16）年には金の保有量に制約されることなく銀行券が発行できるようになり、その翌年の日本銀行法の制定により法律上も兌換の義務がなくなり、わが国は名実ともに管理通貨制度へ移行した。

管理通貨制度のもとでは、中央銀行の判断で通貨量が管理調節されるので、通貨価値の維持を目的とした金融政策がきわめて重要な意味をもつに至った。

(海外主要国への移行)

1930年代初、アメリカの大恐慌に伴う対米輸

6) 吉野俊彦（1962）参照。

出の激減から、イギリスをはじめ多くの国々は金準備の大量流出に見舞われた。金の流出を防ぎ、かつこれによる国内通貨量の過度の収縮が経済活動に及ぼす影響を防止するため、各国はあいついで金本位制度を停止し、管理通貨制度へ移行した。

イ. 戦時の貨幣

日中戦争が拡大に向った1938（昭和13）年、「臨時通貨法」が制定され、以後法律改正を行うことなく新素材、新形式の補助貨幣を発行できることになった。こうして素材を節約した小額貨幣・紙幣が次々に発行された。

日本銀行券についても、太平洋戦争末期には印刷様式を極度に簡略化したものが発行されるようになった。



ロ. 戦後のインフレーションと新円切替え

第2次大戦後わが国は、戦争によって多くの生産設備が失われていたうえ、終戦処理費として巨額の財政支出が行われたため、激しいインフレに見舞われ、国民生活は極度に窮乏した。これに対し政府は、1946（昭和21）年2月、5円以上の銀行券を強制的に金融機関に預入させ、既存の預金とともに封鎖して、一定限度内



（新円切替え後暫くの間新銀行券とみなされ流通した）

に限って新銀行券による払出しを認める非常措置、いわゆる「新円切替え」を実施した。

これにより銀行券発行高はいったん $\frac{1}{4}$ に縮小したが、財政赤字が削減されなかつたため、インフレは依然進行、1949年の厳しい財政緊縮政策によって漸く克服された。

（海外のインフレーション）

金属貨幣との関係を断たれた不換紙幣が登場してから、通貨が過度に増発されて物価が高騰するインフレがしばしば発生するようになつた。歴史上、フランス革命やアメリカ南北戦争当時の紙幣乱発によるインフレが有名であるが、第1次大戦後のドイツ、第2次大戦時のギリシア、ハンガリーなども、大インフレに見舞われ超高額面の紙幣を発行したことで知られている。

ハ. 今日の円

終戦直後、わが国の経済規模は戦前の6～7割の水準に落込んでいたが、1953年前後に戦前水準を回復、1960年代末には国民総生産（G N P）の規模で自由世界第2位に躍進した。1973



現在の日本銀行券

年以降、変動為替相場制への移行と2次にわたる石油危機を無事乗り切り、物価の安定を背景に着実な成長を続けるなど、優れた成果を収めて世界の注目を集めている。

この間、「円」は1964年4月外貨との交換性を回復、変動相場制移行後、長期的には主要通

貨に対して円高傾向を示し、有力な国際通貨の一つとなっている。

[本稿の写真は125ページを除き金属貨幣は×0.65、紙幣は×0.3]

以上

【参考文献】

- [1] 荒木 三郎兵衛 改訂三版『藩札』上・下巻、1969-71年
- [2] 岩橋 勝 「徳川時代の貨幣数量—佐藤正三郎作成貨幣有高表の検討—」『数量経済史論集1：日本経済の発展』日本経済新聞社、1976年
- [3] 梅棹忠夫(編) 『民博誕生』中央公論社、1978年
- [4] _____ 『博物館と情報』中央公論社、1983年
- [5] 大川一司・篠原三代平・梅村又次(編) 『長期経済統計 8 物価』東洋経済新報社、1967年
- [6] 大藏省(編) 『日本財政経済史料』卷2 財政経済学会、1922年
- [7] _____ 『大日本貨幣史』復刻版 朝陽会、1925-26年
- [8] 大藏省造幣局 『造幣局百年史』資料編、1974年
- [9] 木宮泰彦 『日華文化交流史』富山房、1955年
- [10] 北浦大介 「新出土開基勝宝を見る」『貨幣』第227号 東洋貨幣協会、1938年
- [11] 黒板勝美・国史大系編修会編 『続日本紀』前・後篇 吉川弘文館、1952年
- [12] 郡司勇夫 『日本貨幣図鑑』、東洋経済新報社、1981年
- [13] 児玉幸多・小西四郎・竹内理三(監修) 『日本史総覧』I-VI 新人物往来社、1983-84年
- [14] 小葉田淳 『日本の貨幣』至文堂、1958年
- [15] _____ 『日本鉱山史の研究』岩波書店、1968年
- [16] _____ 『日本貨幣流通史』刀江書院、1969年
- [17] 小葉田淳・豊田武・寶月圭吾・森克己(監修) 『読史総覧』新人物往来社、1966年
- [18] 作道洋太郎 『日本貨幣史概論』『大日本貨幣史 別巻』歴史図書社、1970年
- [19] 嶋田 静 『福井藩札銀考』福井豆本の会、1979年
- [20] 新保博 『近世の物価と経済発展—前工業化社会への数量的接近』東洋経済新報社、1978年
- [21] 貨幣館 『宮崎県西臼杵郡発掘古銭に就て』『貨幣』第173号 東洋貨幣協会、1933年
- [22] 曾我部 静雄 『紙幣発達史』印刷庁、1951年
- [23] 瀧本誠一(編) 『新井白石著 白石建議』『日本経済大典』第4巻 史誌出版社、1928年
- [24] _____ 『物茂卿著 政談』『日本経済叢書』巻3 日本経済叢書刊行会、1914年
- [25] 田代和生 『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、1981年
- [26] 玉泉大梁 『室町時代の田租』吉川弘文館、1969年

日本銀行金融研究所貨幣博物館の日本貨幣史展示シナリオ

- [27] 田 谷 博 吉 『近世銀座の研究』吉川弘文館、1963年
- [28] 中 国 人 民 銀 行 『中国歴代貨幣』新華出版社、1982年
- [29] 寺 西 重 郎 「松方デフレのマクロ経済学的分析」『季刊 現代経済』第47号 日本経済新聞社、1982年
- [30] 中 田 易 直 『近世対外関係史の研究』吉川弘文館、1984年
- [31] 中 村 隆 英 「明治日本の経済発展と通貨制度—巨視的分析」『季刊 現代経済』第47号 日本経済新聞社、1982年
- [32] 西 川 俊 作 「わが国19世紀の経済成長—ある展望」『季刊 現代経済』第47号 日本経済新聞社、1982年
- [33] 日本経営史研究所 『三井両替店』三井銀行「三井両替店」編纂委員会、1983年
- [34] 日本銀行調査局(編) 『図録 日本の貨幣』第1-11巻 東洋経済新報社、1972-76年
- [35] 日本銀行調査局 「わが国紙幣制度の源流について—とくに伊勢国山田羽書三百年の歩みー」『調査月報』1980年2月
- [36] 日本銀行百年史 編纂委員会(編) 『日本銀行百年史』第1-5巻 日本銀行、1982-85年
- [37] 林 定 吉 「江戸時代の金銀貨在高について」『中央史学』第4号 中央史学会(中央大学)、1981年
- [38] 彭 信 威 『中国貨幣史』第2版 上海人民出版社、1965年
- [39] 三 上 隆 三 『円の誕生』東洋経済新報社、1975年
- [40] 三 井 高 維 新稿『両替年代記閥鍵』巻1-2 岩波書店、1933年
- [41] 明 治 財 政 史 編 簡 会(編) 『明治財政史』第11巻 明治財政史発行所、1927年
- [42] 山 口 和 雄 「江戸時代における金銀貨の在高—『旧新金銀貨幣鑄造高並流通年度取調書』の分析」『経済学論集』第28巻第4号 東大経済学会、1963年
- [43] 楊 枝 翱 朗 『イギリス信用貨幣史研究』九州大学出版会、1982年
- [44] 吉 野 俊 彦 『日本銀行制度改革史』東京大学出版会、1962年
- [45] Aleksandrs Platbārzdis "The Earliest Swedish Bank Notes-The Note Issues of the Stockholm Bank 1661-1668", Sveriges Första Banksedlar-Stockholms Bancos Sedelutgivning 1661-1668, Sveriges Riksbank, 1960
- [46] The American Numismatic Society Program : The World of Coins, 1981

- [47] _____ Label Text : The World of Coins, 1983
- [48] Bank of Canada The Story Line and Artifact Labels for the Bank's Currency Museum, 1981
- [49] Deutsche Bundesbank Das Papiergeld im Deutschen Reich 1871-1948, Deutsche Bundesbank, 1965

- [50] _____ Frühzeit des Papiergeldes, Beispiele aus der Geldscheinsammlung der Deutschen Bundesbank, 1970
- [51] Federal Reserve Bank of Atlanta Text : Monetary Museum, Federal Reserve Bank of Atlanta, 1982

- [52] Federal Reserve Bank of Richmond Final Script for Money Museum, 1979

- [53] Torgny Lindgren "The Bank Note History of the Sveriges Riksbank, 1668-1968" Riksbankens Sedelhistoria 1668-1968, Sveriges Riksbank, 1968